

信頼が生み出される 社会をめざして

佐藤嘉倫 東北大学大学院文学研究科副研究科長・教授

1. グローバル化する社会における一般的信頼の重要性

「信頼」という概念は社会科学の中で注目されている。それは人々の生活や社会のスムーズな運営にとって重要だからである。このことを理解するために、まず信頼の分類を行おう。信頼の分類方法はさまざまあるが、ここでは個別的信頼と一般的信頼の分類が重要である。個別的信頼とは、親に対する信頼や親戚の〇〇さんに対する信頼や、親友の〇〇さんに対する信頼のように、特定の他者に対する信頼である。これに対して、一般的信頼とは見知らぬ他者に対する信頼である。社会調査では「一般的に、人は信用できると思いますか。それとも、人と付き合うときには、できるだけ用心したほうがよいと思いますか」(JGSS-2016留置調査票)というような質問をして、信用できると答えた人を一般的信頼が高い人だと想定する。

個別的信頼が高い人は比較的自分と似たような身近な人と関係を形成してそこで

互いに協力する傾向にある。人里離れた山村の住民が典型例だろう。そこでは他者に裏切られる危険はないが、村を越えた関係を作るのが難しい。信頼研究の第一人者である山岸俊男はそのような社会を安心社会と名付けた(山岸 1999)。対照的に、一般的信頼が高い人は自分とは異なる他者と関係を形成して協力関係に入ることができる。大都市におけるゆるやかな人間関係が典型例である。もちろん見知らぬ他人に裏切られることもあるが、その人が信頼に応じてくれた場合は大きなメリットがある。山岸(1999)はそのような社会を信頼社会と名付けた。

さらに山岸(1999)は安心社会から信頼社会への移行を推奨する。彼の主張は次のようにまとめられる。今までの日本社会は安心社会だったが、グローバリゼーションの進展などにより自分たちの社会の外側により良い機会が多くみられるようになった。しかし人々が安心社会の中に安住していると、そのような機会を見逃してしまう。したがって日本人は一般的信頼の水準を上げ

て、見知らぬ他者を信頼することでそのような機会を生かさなければならない。

私はこの山岸（1999）の主張に全面的に賛成する。グローバリゼーションの中で自分の見知った人々と付き合っているだけでは、その外にあるさまざまなチャンスを見逃してしまうからである。しかし、それではどのようにして一般的信頼の水準を上げていけばよいのだろうか。残念ながら、山岸（1999）はこのことに対してあまり明確な解答を与えていない。

しかしこのことは山岸（1999）だけの責任ではない。一般的に言って、個別的信頼から一般的信頼が生まれるメカニズムは十分に解明されていない。発達心理学者のエリクソンは親子間の良好な関係やコミュニケーションによって子供の信頼感が育まれると指摘した（Erikson 1950）。これは私たちの経験から見ても納得できる指摘である。しかし子供の親に対する個別的信頼からいかにして見知らぬ他者に対する一般的信頼が形成されるのかは明らかにされていない。あまりに親子間や家族間の個別的信頼が強いと、他者に対する懐疑心が強くなり、一般的信頼が形成されない可能性もある。しかし幼児期に親に虐待された子供は、親に対する個別的信頼の水準が低いだけでなく、他者に対する一般的信頼も低い。このよう

に、個別的信頼と一般的信頼の関係は単純ではない。このことを中心に一般的信頼の形成メカニズムについて考察を進めよう。



2. 個別的信頼から一般的信頼へ

いくつかの実証研究は、近隣住民に対する個別的信頼と見知らぬ他者に対する一般的信頼との間に正の相関関係があることを示している（Yosano and Hayashi 2005; 稲垣 2014; 金澤 2016）。このことは、個別的信頼が何らかの形で一般的信頼の基盤となっていることを示唆する。ただし第1節で述べたように、両者の関係は単純ではない。私はコーネル大学のマイケル・メイシー教授とコンピュータ・シミュレーションによってこの問題に取り組んだ（Macy and Sato 2002）。シミュレーションでは、多くのコミュニティと1つの市場を想定した。人々はコミュニティに留まって近隣の人々と信頼関係を築くか市場に出ていって見知らぬ他者と信頼関係を築くか選択する。これは個別的信頼と一般的信頼に対応する。このシミュレーションでは、さらにコミュニティ間を人々が移動すると想定し、その移動率が一般的信頼に及ぼす影響を見た。人々が移動して新しくコミュニティのメン

バーになると、新参者として従来からいる住民と交流することになる。このことは元からいる住民にとって見知らぬ他者を信頼する機会になる。私たちは、新参者が入ってくるコミュニティが住民にとっていわば他者を信頼することを学ぶ学校になると考えた。

そしてシミュレーションの結果、移動率は一般的信頼に対して逆U字型の影響を及ぼすことが分かった。移動率が低いと、コミュニティの住民たちは新参者と交流し他者を信頼することを学ぶ機会がない。したがって一般的信頼の水準は高まらない。逆に移動率が高すぎると、コミュニティそのものがなくなってしまい、安定した場において新参者を信頼する機会がなくなる。しかし移動率が適度にあると、これらの問題が解消され、コミュニティの住民たちは新参者との交流から見知らぬ他者を信頼することを学ぶ。そして高い一般的信頼を備えた住民たちは市場に出て行って、見知らぬ他者と協力関係に入ることができ、高い利得を得る。そして社会全体として、一般的信頼の高い社会が実現する。

この結果はコンピュータ上で得られたものだが、現実社会について重要な示唆を与えてくれる。それは、個別的信頼と一般的信頼、安心社会と信頼社会を対立的に捉え

る必要はない、ということである。上で紹介した実証研究は、個別的信頼を基盤として一般的信頼が育まれることを示している。そして、コミュニティという安心社会があることで、それを基盤として信頼社会が形成されることも示唆される。

ただし山岸（1999）が指摘するように、人々が閉鎖的な安心社会に住んでいると、他者を信頼することを学ぶ機会がない。新参者が入っていける適度な開放性を持ったコミュニティが一般的信頼を生み出すために必要である。言い換えれば、閉鎖的な安心社会からいきなり信頼社会になるのは不可能で、まずは閉鎖的な安心社会を開放的にする必要がある。グローバル化の時代において、日本にも多くの移民が住むようになった。2016年12月末の在留外国人数は238万人である。彼ら・彼女らは日本型の安心社会を開放的にする可能性を秘めている。

もちろん移民の増加によって、スムーズに閉鎖的な安心社会が開放的な安心社会になり、そして信頼社会が実現することはないだろう。大量の移民が住むコミュニティで移民と地元民の間でコンフリクトが生じていることはさまざまな事例研究で報告されている。このことは上のシミュレーションで得られた知見を現実社会に適用する際に何かが欠けていることを意味する。私は

それが「寛容」だと考える。このことについて次節で検討する。



3. 寛容と一般的信頼

本誌2016年7月号に片岡えみ（栄美）が「信頼社会——寛容性とソーシャル・キャピタル」というタイトルの論文を寄稿している（片岡 2016）。その論文の中で彼女は自らが行った、子供を持つ親を対象とした社会調査のデータ分析を通じて、寛容性が一般的信頼を促進することを示している。ここでの寛容性は2つの尺度で測定されている。1つは「自分の考え方や好み、やり方が違うからと言って、その人を遠ざけることはしない」であり、もう1つは「考え方や価値観の合わない親とは付き合わないようにしている」というものである。後者は寛容性を逆転させた質問になっている。つまりこの質問に対して「あてはまらない」と回答した人は寛容的であると判断できる。

片岡の分析結果を踏まえて、寛容と移動の視点から一般的信頼の生成過程を考察しよう。片岡の分析では教育年数が寛容性を高めることが示されている。高学歴者ほど一般的信頼が高いことは多くの研究で指摘されているが、片岡の分析はそれが寛容性

を媒介したものであることを明らかにしている。

それではなぜ学歴が高くなると異質な他者に寛容になるのだろうか。1つの可能性は高学歴になるほど自分とは異なる出身背景や価値観を持つ人々と出会うようになるからである。公立の小学校や中学校では生徒は近隣の小さな学区から集まるが、高校になると広範囲の地域から生徒が集まる。さらに大学になれば、さらに広い範囲から、場合によれば全国から学生が集まる。このように学歴が高くなるほど、異質な他者と出会い交流する機会が多くなる。この機会を通じて異質な他者に対する寛容性が養われていくと考えられる。

さらに重要なことは、同じ大学で出会う異質な他者は信頼を裏切ることがあまりない、ということである。つまり大学は上のシミュレーションで想定したコミュニティに対応する安心社会であり、そこでの異質な他者は新参者に対応する。開かれた安心社会である大学において、他者に裏切られる不安なく他者に対する寛容性が形成されていくと考えられる。

このように考えると、学歴が寛容性に及ぼす影響は教育そのものの効果というより、学校という安心社会の効果と言えよう。それならば、学歴と同様な効果を持つコミュ

ニティを想定することができる。それは適度に開放的なコミュニティである。上のシミュレーションの結果と片岡の知見を合わせて考えるならば、適度に開放的なコミュニティは異質な他者に対する寛容性を育み、その寛容性が一般的信頼を高めるというメカニズムを想定できる。

しかし適度に開放的なコミュニティは実現可能だろうか。上で述べたように、移民と地元民のコンフリクトの事例は多く報告されている。それは日本だけではない。イギリスでは多文化主義に基づいた政策がかえって移民と地元民の相互無関心を引き起こしたと報告されている（安達 2013）。「お互い理解しあって寛容になりましょう」という精神論では無理がある。何らかの社会的な仕掛けを導入する必要がある。次節ではその仕掛けについて考察する。



4. 信頼の連鎖と橋渡し型社会関係資本の重要性

信頼の連鎖という概念はあまり信頼研究者の間で用いられていないようだが、信頼研究の第一人者だったコールマン（Coleman 1990）はこのことについて興味深い分析をしている。彼が提示した例は次のようになる。ある金曜日の午後にアムステルダム

の造船所で修理が終わった船の所有者（ノルウェー人）が、船長から「造船所から船を出すためにはただちに現金で20万ポンド払わなければなりません」と言われた。船主の手元には20万ポンドもの現金はなかったが、支払わないと週末の係留経費や船員の賃金などで少なくとも20万ポンドの損失になる。そこで船主はロンドンにある商業銀行のノルウェー担当部長に電話し、20万ポンドを用立ててほしいと依頼した。旧知の船主の依頼を受けた部長は、直ちにアムステルダムにある銀行に連絡を取って、20万ポンドを造船所に支払うように依頼した。数分後、アムステルダムの銀行の担当者から部長に支払いが済んだとの連絡があった。そこで部長は船主に電話し、「いつでも船を出せます」と話した。

この例で重要なことは、船主とアムステルダムの銀行の担当者の間には面識も信頼関係もないということである。それにも関わらず、担当者が20万ポンドの支払いをして、船を出せるようになったのは、2つの信頼関係が存在したからである。第1の信頼関係は、ロンドンの商業銀行の部長と船主との関係である。部長は船主が後で20万ポンド支払うことを信頼していた。第2の信頼関係は、部長とアムステルダムの銀行の担当者との関係である。担当者は部長（ないし

はロンドンの商業銀行)が後で20万ポンド支払うことを信頼していた。

この信頼の連鎖で重要な役割を担うのはロンドンの商業銀行の部長である。彼がいなければ、船主がアムステルダム銀行に直接20万ポンドの支払いを依頼することはできなかった。部長は信頼の連鎖のいわば媒介役を演じたことになる。

このような信頼の連鎖は特別なことではなく、私たちの日常生活でもよく起きている。たとえば「紹介」がそれである。私自身の経験でいえば、私の知っている人がある大学の公募に応募すると、その大学から私にその人の人物像や能力について問い合わせが来ることがある。この場合、大学は私の評価能力や判断能力を信頼し、私は応募者の性格や能力について信頼していることになる。

この信頼の連鎖の考え方を前節で述べた問題に適応しよう。松井(2012)は中越沖地震後におけるボランティアと地元住民との関係について興味深い報告をしている。ある被災地区でボランティアが直接、被災者の家を訪問したら、援助の申し出を断られた。県外から来た見知らぬ他人を家に入れることに抵抗感があったからだ。そこで町内会の役員などがボランティアを被災者宅に案内することで、受け入れられるよう

になった。ここでは、町内会役員がボランティアの善意を信頼し、被災者は役員の判断を信頼するという、信頼の連鎖が見られる。

また移民と地元民をつなぐ行政やNGO、NPOの活動もある。たとえば大量に日系ブラジル人が流入し、生活習慣やゴミ出しルールの違いからブラジル人と地元住民の対立が激化したことのある地域では、行政や警察、NPOが仲介役として問題の解決を図った(佐藤 印刷中)。イギリスでも、「コミュニティの結束 (community cohesion)」の名のもとに、移民と地元住民の相互無関心を解消するために、研究機関やNGO、学校などが仲介役を務めている(安達 2013)。

社会関係資本論の文脈で見ると、これらの仲介役は橋渡し型社会関係資本の機能を果たしていると考えられる。社会関係資本という概念は、人々の関係(社会ネットワーク)が人々や社会にさまざまな影響を及ぼすことに着目したものである。そして社会関係資本は、比較的均質な人々の閉鎖的なネットワークからなる結束型社会関係資本と比較的異質な人々の開放的なネットワークからなる橋渡し型社会関係資本に分類できる。1つのコミュニティ内に移民と地元住民が分離して住んでいる状態では、2つの結束型社会関係資本が存在しているが、

両者をつなげる橋渡し型社会関係資本は存在しない。このため、共生しても相互無関心という状態になってしまう。この状況を解決するためには、仲介役を担う人なり集団、組織が必要である。それは行政かもしれないし、町内会やNPOかもしれない。そのような仲介役を通じて相互交流が進むことで、相手に対する寛容が生み出され、それによって相手に対する信頼が高まっていく可能性がある。グローバル化に対する国レベルの政策や制度も必要だが、このような草の根レベルにおける寛容と一般的信頼を作り出す仕掛けも同様に重要である。

移民と地元住民との関係に限らず、橋渡し型社会関係資本を備えた、適度に開放的な安心社会は、人々の間に寛容性を生み出し、それが一般的信頼の形成を促進する。これが個別的信頼から一般的信頼が生み出され、安心社会が信頼社会に移行するプロセスである。

参考文献

- 安達智史. 2013. 『リベラル・ナショナリズムと多文化主義——イギリスの社会統合とムスリム』 勁草書房.
- Coleman, James S. 1990. *Foundations of Social Theory* Belknap Press of Harvard University Press. (久慈利武監訳. 2004-2006. 『社会理論の基礎』 青木書店.)
- Erikson, Erik H. 1950. *Childhood and Society* W.W. Norton. (仁科弥生訳. 1977-1980. 『幼児期と社会』 みすず書房.)

- 稲垣佑典. 2014. 『信頼生成過程の検討による「信頼の解き放ち理論」再考——個人と地域コミュニティとの関係性に着目して』 2013年度東北大学博士論文.
- 金澤悠介. 2016. 『信頼生成メカニズムの解明——社会的ネットワークに着目して』 2016年度東北大学博士論文.
- 片岡えみ (栄美). 2016. 「信頼社会——寛容性とソーシャル・キャピタル」『TASC MONTHLY』 No. 487.
- Macy, Michael W. and Yoshimichi Sato. 2002. "Trust, Cooperation, and Market Formation in the U.S. and Japan." *Proceedings of National Academy of Sciences* 99(Suppl. 3): 7214-7220.
- 松井克浩. 2012. 「防災コミュニティと町内会——中越地震・中越沖地震の経験から」吉原直樹編『防災の社会学——防災コミュニティの社会設計に向けて（第二版）』有信堂.
- 佐藤嘉倫. 印刷中. 「合理的選択理論から見た社会関係資本とコミュニティの関係」『学術の動向』.
- 山岸俊男. 1999. 『安心社会から信頼社会へ——日本型システムの行方』中央公論新社.
- Yosano, Arinori and Nahoko Hayashi. 2005. "Social Stratification, Intermediary Groups and Creation of Trustfulness." 『理論と方法』 20(1): 27-44.

プロフィール.....
さとう・よしみち 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。1997年に東北大学より博士（文学）を授与される。横浜市立大学商学部助教授、シカゴ大学・コーネル大学社会学部客員研究員等を経て、現在、東北大学大学院文学研究科副研究科長・教授。主な著書に『ゲーム理論 人間と社会の複雑な関係を解く（ワードマップ）』（新曜社、2008年）、『意図的社会変動の理論』（東京大学出版会、1998年）、『社会理論の再興：社会システム論と再帰的自己組織性を越えて』（編著・ミネルヴァ書房、2016年）、『ソーシャル・キャピタルと格差社会：幸福の計量社会学』（編著・東京大学出版会、2014年）などがある。